

006 うさお

パソコンの電源がまた入らなくなりました。このパソコンは以前、きな臭い煙とともにプシュウっと昇天されましたので、マザーボード、CPU、メモリーなどをそっくり入れ替えたものです。プシュウ（またはポア）の原因追求をせずいたのが、間違いの元だったようで、家に買い置きの500WのATX電源に換えたら、嘘のように生き返りました。（買い置きのパソコン用電源ってどこの家にもあるのかな？それともうさおのところだけ？）



前のパソコンのご冥福を祈って「一迅煙院布臭昇天居士」と名付けてあげました。

さて、志水辰夫って人は独特の語り口を持っていて、ウィリアム・アイリッシュのような感じを抱いています。タイトルが良いか、出だしの語り口が良いか、ぐっと読者をひきつけます。ストーリーはがちがちのハードボイルドに哀愁をスパイスしています。まるで艶歌です。この人の本名は川村光暁といい、1936年12月17日に高知県で生まれています。うさおより一回りくらい上の歳の人ですが、読んだ感じはそんな風に思えません。



志水辰夫

経歴によりますと、高知商業高校を卒業後、公務員になりやがて出版社に勤務します。雑誌のライターなどを経て、1981年に小説家としてデビューし、現在は札幌に住んでいるようです。自宅は東京にあるとのことですから、家が2軒あるのかな？こんな感じの人です。出版界では高村薫と顔の評価が



高村薫

同格なのだそうで、高村薫などは顔を見たら小説を読む気がしなくなったって、ひどい言われようですが。ふ～ん、高村薫は品のいい顔のようにお見受けします・・・、独身のようなのですが・・・。

さて志水辰夫のキャッチするタイトルだけを集めてみますと、以下の通りです。

「生きいそぎ」、「道草ばかりしてきた」、「きみ去りしのち」、「いつか浦島」、「いまひとたびの」、「滅びし者へ」、「花ならアザミ」、「行きずりの街」、「帰りなん、いざ」、「深夜ふたたび」、「こっちは渤海」、「狼でもなく」、「背いて故郷」、「尋ねて雪か」、「散る花もあり」、「あっちが上海」、「裂けて海峡」、「飢えて狼」。確かに、ある法則でタイトルを造っているようです。このタイトルだけで、読みたい気がします。その割りに内容、タイトルをよく忘れて、二度借りをしているうさおなのでした。

作品名	作家名	感想	評価
オンリー・イエスタデイ	志水辰夫	雨の海辺で、何者かに追われる人妻を救った峻介は、彼女を自宅にかくまう。夫は重大秘密を握って逃亡、彼女は或る勢力の追求をうけている。元暴力団のライターの俊介にも敵方の手が・・・。「冷たい雨の降る夜、池内俊介は芝浦で女を拾った。」の冒頭の句がなかなか。叙情と呼ばれても。	☆☆☆☆☆ 彼女は痩せて目が釣りあがった女性で、最初は大変男性的であるが、徐々に女性的になってくる。シミタツ節がそこかしこに現れてきます。
沈むさかな	式田ティエン	カズは湘南の中華料理屋でアルバイトをしている。父の死の真相が海辺のクラブにあると知ったカズは、クラブと併設されているダイビングショップに勤めを変え、真相を探り始める。友人のダイバーが変死を遂げる。淡々と話は進む。青春小説かな。	☆☆☆☆☆ きたがわ翔の「B.B.フィッシュ」みたいな淡々とした感じだった。あっ、北川翔ってのは、俳優だとは知りませんでした。

鬼平犯科帳 22 迷路	池波正太郎	与力・秋本源蔵が半弓の矢で殺された。これに端を発し、長谷川平蔵が襲われ、下僕までも殺された。平蔵の長男辰蔵、娘の嫁ぎ先まで狙われた。敵は何者か？追詰められた平蔵は…。	☆☆☆ 日出彦さんが持っていた本で、読んだような気がする。昔の連載漫画のようで、次を期待しちゃう。
鬼平犯科帳 16	池波正太郎	影法師；網虫のお吉；白根の万左衛門；火つけ船頭；見張りの糸；霜夜 出会茶屋で女賊の裸身をむさぼりつくす同心の狙いは。妻を寝とられた腹いせに放火を企てた船頭が、闇の中、商家へ吸い込まれてゆく黒い影の群れを見た。巷に生きる悪に鬼平は立ち向う。	☆☆☆ 長谷川平蔵はこれらの作品の中では、ハードボイルドになるんだろうな。結構突き放したところが、柴田錬三郎っぽい。
秘伝の声 上巻	池波正太郎	新宿角筈村に剣術道場を構える老剣客は、臨終の床で内弟子、白根岩蔵と成子雪丸に、墓に秘伝の書を埋めよと言ひ残す。極意を極めたい岩蔵は、遺言にそむき、秘伝書を奪って出奔する。道場を継いだ雪丸は、道場を守り立て、角筈村の人となるが…	☆☆☆☆ このあたりは、藤沢周平とプロットが混同しそうです。でも貧乏たらしいのが藤沢で、そうでないのが池波です。
秘伝の声 下巻			
こちら、団地探偵局	赤川次郎	毎日が退屈で死にそうになっている団地の主婦政子が、高校以来の友人並子に再会したのは団地の公園だった。並子は学生時代、美貌・才知・人柄の三拍子揃った才媛であったが、二歳の男児を持つ現在もちっともかわらず若々しい。その秘密は、何と内職がわりに私立探偵をやることだった。	☆☆ すいません。詰まりませんでした。一時は赤川作品を貪るように読んだんだけど、気持ちじゃなくなったのかな？
密告	真保裕一	川崎中央署生活安全総務係の萱野は、ある日、上司の矢木沢に面罵された。競技射撃で五輪出場権を懸けて争った選手時代の確執から、矢木沢の接待疑惑を密告したと思われた。自らの汚名を晴らすため、萱野は真の密告者を捜す。	☆☆ 真保作品は本当に全部読み切っちゃたんじゃないかな。前に借りているよ！
李欧	高村薫	吉田一彰はバイト先のクラブで「李欧」と出会う。その美しい殺人者は一彰の運命を決定する。一彰は、李欧の殺人に関わったことから、捜査機関と殺された側から追われ、昔関わりがあった守山の零細工場の主となり、李欧は海外で実業家として巨万の富を築く。ずっと李欧への思いを持ち続けていた一彰は、運命の出会いから15年後、咲子の死後、李欧からの誘いで中国大陸へ渡る。	☆☆☆☆ 面白いと思いつつも、依然読んだような気が……。キャッチを見ると「拳銃をわが手に」の焼き直し版だっって、でもストーリーが微妙に違うように思うが、2度読みのうさおのこと、当てにはならない。
江戸っ子侍 上	柴田錬三郎	幕府の屋台骨が軋み始めた天保の江戸が舞台。公儀が天皇家の姫君を奸商に売るたくらみが。鼻をあかしてやると希代の盗っ人、吉兵衛は、宵雛に出会った白面の若侍、浅形新一郎と伝奏屋敷から姫を盗み出した。赤あざの剣豪、すり、常磐津の師匠、元大目付が絡み事態は二転三転する。	☆☆☆ まあ、東映よき時代の典型的な時代劇で、運が悪いように悪いように転がって、大団円って訳。先が判って、安心して読めるけど。
江戸っ子侍 下			
少年みなごろし団	宗田理	5人の少年たちで構成される秘密結社「少年麿団」。その目的は、汚ないおとなたちをやっつけることだ。メンバーたちは、それぞれの特技を生かし、奇抜なアイデアでおとなたちをやりこめる。	☆☆ 思ってたよりは面白くなかった。何かと混同して、この作家が面白い作家だと間違えているのかも。
迷宮遡行	貫井徳郎	失業中の男が妻に逃げられた。妻を探しているうちに、なぜか事件に飲み込まれていく。妻は何者？妻を探っていくと、そこにやくざの影が。台湾マフィアや覚醒剤までも係わってくる。ロングキスグッドバイじゃないんだからさあ！	☆☆☆☆ TICA さんから借りた本だと思ふ。面白かった。でも、もう少し何か欲しいぞ！コースタームービーみたいな乗りかな。

僕の殺人	太田忠司	青春小説っぽい語り口で始まる、「僕が 5 歳の時、信州の別荘で惨劇が起こった。この事件で記憶と両親を失った。あれから 10 年、事件の真相に迫ろうとする男が現れ殺された。あの事件には、なにか秘密がある。僕は犠牲者ではなく、加害者だったのか…。	☆☆☆ これも TICA さんから借りた本だと思う。式田ティエンと同じ香りがする。あの頃は本当に胸に棘刺す事ばかりだったなあ。
塔の断章	乾 くるみ	作家・辰巳まるみが書いた小説「機械の森」。そのゲーム化のためにスタッフ 8 人が湖畔の別荘に集った。社長令嬢の香織が別荘の尖塔から墜死したのだが妊娠していた娘を突き落とした犯人は誰？	☆☆ これも TICA さんから借りた本だと思う。この手ものは若干苦手！本格なら本格にして欲しい。

国土交通省鉄道局局長の「鉄道の利便性」を説く国会答弁の絵の後半部分です。これも国交省のホームページに本当に極小で載っているのでも、とっても汚い絵になっていました。友人からこんな時は絵の片隅にそっとイニシャルを目立たないように入れとくものだと教わりました。その通りだ！

こんなに利便性が高くなりますって絵だが、そんな風に描いているからで、やはり、そりゃあお金があればねって！絵空事だよ。あつ、絵か！！（°_°）

